

乳幼児期における遊びの教育学的意義についての一考察 (2)

—ピアジェの子ども理解の視点を軸に—

Consideration on Pedagogical Importance of Playing in Infancy(2)

—Based on Piaget's Viewpoint of Understanding Children—

猪田裕子

要旨

児童心理学者であるピアジェ (Piaget, Jean. 1896-1980) の残した足跡は偉大なものである。特に、国際新教育運動に深い理解を示し、その運動を推進させ、国際連盟の援助のもとジュネーブに創設した国際教育事務局の局長として活躍する姿に、彼の子どもに対する深い理解が伺える。この様な彼の研究の視点は、現在でも子どもの発達や教育において非常に重要なものとなっている。また、彼は教育環境に関しても常に鋭い指摘を行っている。それは人的環境としての保育者の資質にまで及ぶものであり、「知的自由の教育は、協力と共同による探求を前提としている。生徒と教師との間に存在する関係は、教師＝権威者であると言う視点から不十分である。もし批判的精神と証明の意味を教えたいのであれば、生徒達は、共同による仕事を実行したり、また1日のある時間を自由に議論する事が必要である。学校自体の中に、生徒自身による自発的な社会生活が必要となる」¹との言葉からも理解できる。

そこで、今回は上述の彼の言葉を観照し応用することで、実践の場における観察記録の読み取りを行う。自発的な活動としての遊びと共に、自発的な社会生活をも営む事が出来る子どもの姿を考察する事で、乳幼児教育における遊びの教育学的意義の探究が可能となると考えるからである。

キーワード：遊び 学び 主体性 自由 観察 子ども理解

はじめに

世界的な児童心理学者であるピアジェ (Piaget, Jean. 1896-1980) は、その研究と並行し、新教育運動にも積極的に関わっていた事は多くの者が知る所である。また、国際教育局 (International Bureau of Education) 初代局長でもあり、長きに亘りその職務を遂行し、その後、第二次世界大戦後に設立されたユネスコと共同で、教育国際会議をも運営していた。この様に、ユネスコの活動にも深く関わる事で『教育の未来』(Où va l'éducation) 等の論文も執筆された訳であるが、多大なる心理学研究の業績の傍で、教育学的内容の論文はごく僅かな

ものに留まった。

その様な中、彼の初期における心理学研究²が示してきたものは、子どもの思考における自己中心性の本性を明らかにする事で、そこから脱するまでの道筋や過程を検証する事であった。そこでは、子どもの自発的な活動が重んじられ、興味から導かれる活動、自然的発達の重視とそこから示される活力、自由と自律、個人と乳幼児期の尊重と言う考えが提示された。これは、まさに新教育運動の中核を成すものであり、教師や教科書中心の画一的教育から子どもの主体性や活動性、創造性を重んじる教育への転回でもあった。

更に、ジュネーブにあるルソー研究所附属幼稚園で行った子どもの思考の研究において、子どもの自発的で自由な活動である遊びとその環境との関係に関して次の様に言及している。「ジュネーブの幼稚園における子どもらは、その座右に教育的遊びの材料を持っている。これらをもって彼らは全く自由に遊び得るものであり、こうした環境において正しく自己中心性言語は発達し、あらわれてきているのである。」³また、子どもの自発的な活動を重視する根拠として「子どもがあるものを理解する為には、自らそれを構成せねばならない事、彼らはそれを再発明せねばならないと言う事である。ふつう子どもに何かを教える時はいつも、我々は子ども自らがそれを創り出し、発見する事を妨げている」⁴と述べ、大人の子どもの対する姿勢によっては、内面から創りだそうとする子どもの自発的で意欲的な力を妨げる事になると警鐘を鳴らしている。つまり、教育とは人間形成の場であり、知識のみの伝授ではない。特に、乳幼児期において自発的な活動である遊びを通して育まれるものは計り知れない。

そこで、実際の保育現場で、彼の子ども理解の視点がどの様に有用なものとして展開されているのかを、保育者の観察記録に基づき検証する。また、彼の子ども理解の視点が、現場の保育者にどの様に理解され、それが一人一人の子ども理解にどの様に反映されているのかを考察する。これにより、乳幼児教育における遊びの教育学的意義が更に深まると考えるからである。

1. ピアジェにおける遊びの視点

i) 遊びを考察する視点

乳幼児の教育を考える時、そこには必ず遊びが存在する。広辞苑⁵によると、「遊戯」または「遊び」と言う言葉の中には「遊び戯れる事」「幼稚園や小学校等で、運動や娯楽、また社会性を身に付ける事等を目的として一定の方法で行う遊び」「仕事や勉強の合間」「人生から遊離した美の世界を求める事」「気持ちのゆとり」「余裕」等、多様な視点からその存在が挙げられている。しかし、ここでは遊戯における教育学的意義と言う視点に絞り、それを問う事とする。何故なら、遊びと言う性格上、これまで多種多様な遊びを定義する諸説が、歴史の中で議論を繰り返してきたからである。例えば、スペンサー (H.Spencer,1820-1903)⁶やシラー (F.Schiller, 1759-1805)⁷等による生理学的立場からの定義では、遊びを過剰エネルギー説 (Surplus Energy Theory of Play)⁸の視点から探究し、グロース (K.Groos,1861-1946)⁹は、生物学的立

場から、将来の生活の為に準備するものと定義する事で、遊びを準備説 (Preparation Theory of Play)¹⁰とした。また、ホール (S.Hall,1844-1924)¹¹は、子どもの遊びを種族発生 of 個体発生における反復と定義する事で、それを反復発生説 (Recapitulation Theory of Play)¹²の視点から説き、フロイト (S.Freud,1856-1939)¹³は、精神分析学の立場から、遊びを抑圧された性的欲求を満足させるものと定義する事で、精神分析説 (Psychoanalytic Theory of Play)¹⁴からの探究を行った。更には、活動的休養を遊びと定義した休養説や文明生活において精神的疲労を緩和する為の身体活動と定義したリラクゼーション説等、その捉え方は研究者により様々であった。この様に、遊びとはそれを研究の対象とする者によって多様な性格を見せるものである。それ故、その視点を定めなければ、一つの方向性を見出す為の探究さえも困難になると考える。

そこで、遊びの教育学的意義の視点であるが、それは西洋哲学思想におけるプラトン (Plātōn,BC427-BC347) にまで遡る事が出来る。彼は「養育とは、子供の遊びを通じてその魂を導き、彼が大人になったとき充分な腕前の者とならねばならぬ仕事、その仕事に卓越する事に対し、特に強い愛着を持つ様にさせるものなのである」¹⁵と述べる事で、遊びにおける教育学的位置づけの歴史的発火点となった。その後、様々な思想家達がそれぞれに歴史の中で翻弄されながらも各々の論を展開して行った。その中でシラーは、その著『人間の美的教育に関する書簡』¹⁶において「人間のあらゆる状態の中で、まさに遊びこそは、ただ遊びだけが人間を完全なものにする」¹⁷と述べる事で、遊びに教育学的意義を賦与し、それは完全な人間を形成する為の理念であるとした。また、ホイジンガ (J.Huizinga,1872-1945)¹⁸は、その著『ホモ・ルーデンス』¹⁹において、遊びは文化より以前にあり、様々な文化現象の中には総てに、遊び的な意図や構図を見出す事が出来ると言っている。つまり、遊びとは何らかの意味を持った一つの機能であり、人間の生き方全体が遊びであると言う事である。ここに共通して見えてくるものが、自由な活動としての遊びと人間形成と言う相互補完的な視点である。ここでの自由とは、カイヨワ (R.Caillois,1913-1978)²⁰の遊びに対する定義を借りると「遊びたい人間だけが、遊びたいと思う場合だけ、遊びたいと思う間だけ遊ぶ」²¹と述べている所のそれと同意である。また、彼は「それは限定した時間と空間の中で進行し、一定の法則に従って秩序正しく進行される」²²と言い、自由な活動としての遊びを尊重する為には、そこには予め定められた明確な空間と時間とが存在すると言う見方をしている。つまり、ただ単に子どもの自由を尊重すれば良いと言うものではない。そこには、教育学的意義のもと子ども一人一人に応じた様々な環境が確保され、そこに生じる自由こそが遊びにおける自由であると言うのである。

このような自由な遊びこそ教育であるとする捉え方への道を示したのがフレーベル (F.Fröbel, 1782-1852) である。彼は、遊びを子どもの根源的存在形態とし、それを性善説的に理解する事で、子どもに内在するものの発現を促す最も優れた教育方法であるとした。

ところで、現代のフランス哲学者であるアンリオ (J.Henriot,1923~)²³であるが、彼はその著

『遊び—遊ぶ主体の現象学へ—』において「遊び手なしには遊びは意味も機能も持ちえないはずだし、遊び手は遊ぶ事が出来るのだから、遊ぶ事の正体を理解し得る者は彼だけなのだ」²⁴とし、「遊びは、遊びつつある遊び手がしている事以外の、何ものでもない。一度彼が遊ぶ事をやめてしまったら、彼の遊びにはいったい何が残るだろう」²⁵と述べている。しかし、ここには教育学的視点からの考察は全くされていない。つまり、彼の興味は「遊び」そのものに向けられているのだ。それ故、彼の遊びへの視点は、人間の発達との関係で捉える事が一切成されていないのである。

上述の様な変遷の中、遊びと知的発達との相関関係を分析する事で遊びの発達段階を提起したピアジェの視点には、遊びの教育学的意義が存在すると考える。彼は凡そ60冊程の著書の中で、ルソー研究所所長として活動中及びユネスコでの活動中に教育学的内容の論文を2冊²⁶のみ執筆した。そこでは、彼の子ども理解と主体的な学びに関する視点から教育のあるべき姿が論じられている。それ故、その視点を軸に遊びの教育学的意義を考察する。

ii) 遊びの教育学的意義

ピアジェは「子ども達は自ら実験をし、自ら研究をする事が出来る状態になければならない。教師は勿論、適切な素材を準備する事によって、彼らを指導する事が出来る。しかし重要な事は、子どもがある事柄を理解する為には、自らそれを構成せねばならない事、彼はそれを再発明せねばならないと言う事である。普通、子どもに何かを教える時いつも、我々は子ども自らがそれを発明するのを妨げている。他方、彼自身で発見させるものは、私の友人の数学者の場合と同様に、彼の残りの生涯ずっと、ありありとした形で残るであろう」²⁷と述べている。そこには、自らの興味や関心、意欲を育む事が、自発的で自律的な学習を促すと言う確信がある。また、それらを取巻く教育環境において十分な配慮が成される事により、自己発見及び自己学習の場が保証されると考えている。

そこで、ピアジェは独自の知能理論を形成する事により、自発的な活動としての遊びが如何に子どもの知能発達に深く関わっているかを探究したのである。つまり、乳幼児の遊びにおける教育学的意義に着目したのである。「遊びは、感覚—運動的訓練及び象徴作用と言う二つの本質的な形のもとで、自分の活動への実在の同化であり、その活動に必要な栄養を提供し、自我の多様な要求に応じて現実を変革するのである。児童教育の能動的な方法が全て、子ども達が遊びながら知的現実を首尾よく同化出来る様になる様に、適した素材を子ども達に提供する事を強く要求するのはその為である。そうでなければ、知的現実は子どもの知能と無縁なままに留まるであろう」²⁸と述べている所からも、それを重視している事が容易に理解出来る。

この様に、彼は児童心理学者でありながら、教育の問題をあらゆる視点から考察しようとした。それは、彼のジュネーブでの演説からも何う事が出来る。「大戦後、かつてない程に我々の文明は、激変期に直面し、文明がその間で選択に迷っている2つの道は野蛮への退行か、そ

れとも国際的かつ社会的な体制化かしかない（中略）教育のみが悪を正すだろうと言う確信が
かつてないほど必要である」²⁹と、国際的な教育改革にも進んで賛同している。この様に、教
育へ多大なる関心を寄せながらも、その主張の根拠を心理学に求めたのである。この教育学と
心理学との密接な結びつきが、彼の子どもを理解する方向性や教育における遊びの重要性を確
固たるものにしたのではないかと考える。

そこで、遊びの捉え方であるが、そこには基本的に二つの見方³⁰が存在する。一方は、活動
の外的形態から捉え様とする遊びである。他方、活動の主体の意識や心理状態に目を向けて、
それを遊びと見做すか否かである。前者は、遊びと見做される外的形態を伴った活動の事であ
る。例えば、「ごっこ遊び」「椅子取りゲーム」「劇遊び」等を、子どもの意識や心理状態と関
係なく遊びと見做す見方である。後者は、まさに主体の心理状態により遊びになったり、そう
ではなくなったりと判断する見方である。勿論、子どもの心理状態に主軸を置くピアジェの視
点は後者である事は確かである。

これら双方の視点は、これまで西欧の歴史の中にも存在してきた。しかし、教育思想の歴史
的流れは、確実に後者の見方へと軸を定めてきた経緯がある。何故なら、多くの思想家達は、
乳幼児期の全面的発達には遊びにおいて保障されると考えていたからである。フレーベルは「遊
びは、喜びと自由と満足と内的及び外的安心と世界との和合とを生み出す。全ての善なるもの
の源泉は遊びの中にあり、遊びから生じる」³¹と述べる事で、その考えを表出している。ピアジェ
は「知的あるいは道徳的な制約を課す事のみを事とする権威主義的な雰囲気では、成長する事
は出来ない。人格の自律性と相互性を育む為には、これとは反対に、実際の体験と自由な研究
とが絶対に必要である。そしてこれらが欠如していた場合には、獲得されたあらゆる人間的価
値も、単なる幻にすぎない」³²と述べる事で、自発的な活動としての遊びに教育学的意義を賦
与している。この様に、教育を単なる知識のみと捉えるのではなく、全ての調和に基づいて形
成されて行く人間形成であると言う視点で捉える事を前提に、彼の遊びへの教育学的意義付け
が成されていると考える。

II. 乳幼児教育における遊びの視点

i) 遊びの環境

ピアジェは教育環境において「家庭教育には子ども達の興味と活動を刺激するものが欠けて
いるから、色々な教材をふんだんに用い、幼稚園と言う環境を生かして、この欠陥を補って行
かなければならない」³³と、具体的に述べている。つまり、教育には子どもの興味と活動を導
いて行く為の、過不足のない的確な環境構成が必要とされているのである。ここでの家庭教育
とは、貧しい生活を余儀なくされている人達を彼は指しているのであるが、現代社会において
は、貧しさよりも豊かさの方が弊害であると言える。あまりにも多種多様な物質に囲まれてお
り、子ども自身が何を選択したらよいのか盲目状態に陥る可能性もあるからである。とは言え、

彼は心理学的見地から子どもの成長を認識しつつ、教育学的見地から深い人間形成への洞察に至るまで、その調和のとれた教育の必要性を我々に示し、未来の教育へと希望を抱いたのである。

また、彼は「幼稚園での教育的遊びは、いつも3歳から4歳の、特別な目的のない遊び活動の間に生ずる」³⁴と述べているが、この目的のない遊び活動とは決して放任を意味するものではない。子ども達が自己責任の内に遊びを選択し、決定出来る環境があってこそ可能な教育方法なのである。つまり、適切な環境による刺激から、自然発生的な行動を呼び起こすのである。これは、子どもの認識能力をしっかりと組織づける為であるとピアジェは述べている。しかし一方で、保育者が子どもに欲求不満を与えない様にとするあまり「指導の方向性を欠いた自由の行き過ぎが生じ、さして教育効果もない、何でも遊戯化する傾向が生まれた」³⁵との報告もされている。ここに、子どもの主体性を尊重する教育の難しさが語られている。遊びの適切な環境を整えると言う事は、子どもをあらゆる側面から深く理解し、現在の状況を的確に判断出来る保育者や養育者でなければ、それを可能とする事は難しいのである。

結局、何故遊びの環境を重視するかと言うと、自発的な活動を基に、子ども自らが真理の探究を行うと言う事を教育の中心に据えているからであり、遊びの社会を媒体に自らの経験を構成、再構成する事で真の適応へと向かうからである。更に、これらが子どもの社会化、及び興味や関心による知識の形成にも大いに役立つのである。自発的活動を重んじる教育方法の基本原理をピアジェは「理解すると言う事は、発見し発明する事、言い換えれば、再発見し再構成する事である」³⁶と明確に述べている。教えられた事だけを反復する人間の育成ではなく、創造する事の出来る人間形成を目指し、善き人格へと発展させて行く事が教育なのである。乳幼児期における遊びとその環境がいかに重要であるかは、彼の理論からも容易に理解出来る。

ii) 子どもの遊びと観察

ピアジェは子どもの認知発達の過程を研究しながら、大人と子どもの構造の違いを示し、遊びには子ども独自の発達過程がある事を、自身の膨大な観察記録から明らかにした。そして、乳幼児期における教育の重要性を主張する彼は「戦後の大改革が科学的実験的精神の形成に力点を置く限り、その形成の諸条件内において、外見上は最も目立たないもの《就学前教育》を無視しているのは全く正気の沙汰ではない。《高等》水準の教育者の中の就学前教育を嘲笑している者達は、手引きの方法を改善する為に《保育園》の子ども達のクラスまでおりて行く事を辞さなかったアメリカ合衆国の専門物理学者達と接触したらよからう」³⁷と、就学前教育における無関心さにおいて痛烈な批判を行っている。それほど、彼はこの時期における教育の必要性や重要性、子どもの可能性を確信していたのだ。そして、その中心には絶えず自発的活動である遊びが存在している。

この様に、乳幼児教育の重要性を語るピアジェではあるが、遊びの環境に関して「適切な環境」との表現を用いながらも、その具体的内容には触れず曖昧なままである。彼は児童心理学者であり、保育者ではないので仕方のない事である。それ故、それを実践する保育者は子どもの姿から適切な環境を整えなければならない。その為には、子どもの姿の観察が必用不可欠である。子どもの成長や発達、現在の興味や関心等を観察し分析し考察する事で見えてくる子どもの姿や聴こえてくる声があるからである。勿論、ピアジェ自身も、自らの子どもの様子を観察することで、子どもが持つ自然に成熟していく能力と環境に対する相互作用との関係に興味を抱いたという経緯がある。

そこで、子ども理解の為の観察方法である。特に専門的なスキルを必要としているのではなく、子どもに一番近い保育者が、子どもの遊びを「ありのまま」に観察し記録するのである。何故なら、大人の身勝手な思い込みや主観の入ってこない「ありのまま」の観察の中に、子ども理解のヒントが隠されているからである。そこでは、何も気負う事なく、ただ単純に気がついた子どもの動きや発言をメモしておくのである。その記録を媒体とし、複数の大人で共有し合う事により、子どもの日ごろの仲間関係や関心事、発達状況等を複眼的に振り返る事が出来、日々の保育や関わり等に反映させて行く事が可能となるのである。この様に、「ありのまま」の子どもの姿を観察の中で積み重ねる事で、子ども自身の育つ力を尊重し、その力を信じて待つ事が出来る様になり、目の前にいる子ども理解の視点が培われて行く。まさにピアジェの哲学がここに存在する。

Ⅲ. 観察記録を通して捉える子どもの姿

i) 偶然から見えてくる子どもの姿

2009年よりA市公立保育所10園の所長先生方による自主保育研究会³⁸が発足され、それは現在まで継続されている。共に保育内容の研究を深める中、子どもをどの様に理解するかにより、保育実践も変わり保育の質も深まると言う見解に辿り着いた。そこで、ピアジェの子どもを理解する視点を軸に、観察記録を取る事となった。

下記は、様々な思いで観察記録を継続している中で、偶然に捉えられた1枚の写真から、一人の子どもの心の動きを理解する事が出来た事例である。つまり、この記録がなければ、その子どもの本当の心を理解する事は出来ておらず、保育者同士での共有も出来ていなかったと言う。

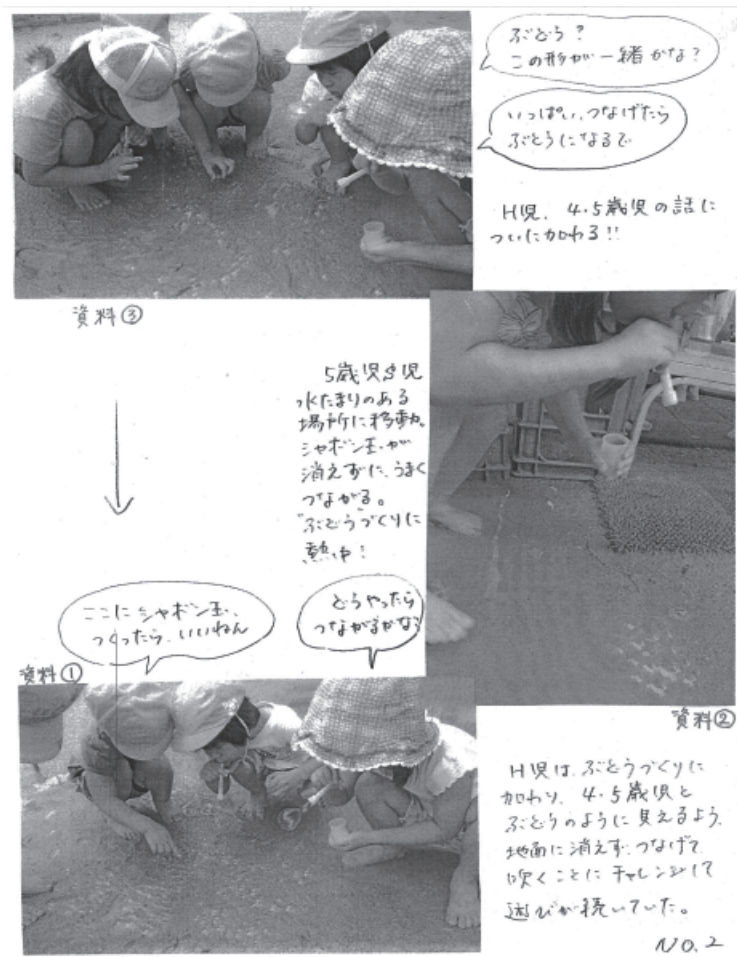
観察記録① 7月3日(火) 5歳児女児 E子・K子・S子(D保育所)

《子どもの記録》

・雨上がりの園庭には、水たまりやぬかるみがあった。3歳児から5歳児がシャボン玉遊びをしていた。E子、K子、S子が地面に向かってシャボン玉を吹いている。(遊びに対し、関心

を持ち熱中している状況である)

- ・保育者「何しているの?」
- ・E子「シャボン玉で、青虫が出来るねん!」(様々な困難に立ち向かっている姿である)
- ・他の子どもも「青虫出来た!」と、シャボン玉を続けて吹いている。
- ・K子「あっ!ブドウにも見える!」(自分の考えや気持ちを表現している)
- ・S子「これと一緒にの形やん」(近くにあったスーパーボールを持ってきて、シャボン玉と比べる)



《子どもの学び》

ぬかるんだ地面の上で、シャボン玉は消えずにつながる事や、色々な形に見える事と、スーパーボールと同じ球体だった事等、友達と驚きや発見を共感していた。

《保育者の学び》

地面に向かってシャボン玉を吹く姿を見た時、「えっ？」と思ったが、ぬかるんだ地面でシャボン玉が消えない事やつながる面白さを子ども達が発見した事は、すごいと思った。

《次への展開》

シャボン玉遊びだけではなく、色水遊びや泡遊び等、子どもが試したり発見したり出来る遊びを取り入れていきたい。

観察記録② 7月4日（水）3歳児 H児（D保育所）

H児は普段から言葉数の少ない男児である。話す力はあるが、よほどの事がない限り、声を発しない日常生活を送っている。人との関係を培うと言う事が難しいH児の事を保育者達は常に気を付けていた。また、H児はシャボン玉を得意としていた。

《子どもの記録》

- ・H児はシャボン玉を続けて吹ける様になって、シャボン玉遊びを毎日していた。
- ・E子とS子はシャボン玉を吹いて楽しんでいる。
- ・H児は、E子達が地面に向かってシャボン玉を吹いている側まで来て、立って見ている。（偶然、写真にH児の足だけが映っていた）
- ・青虫やブドウの形を作り始めると、E子達の輪の中に入り座って見ている。（偶然の写真より）
- ・スーパーボールと同じ形や！と言った友達の話にも、その場から離れず参加している。
- ・S子と会話をしながら、地面にシャボン玉を吹いてみる。



資料④

シャボン玉遊びが始まった頃、Hくんは興の味を持ち、何卒も挑戦していた。うまく吹けるようになったHくんは、この日も、772の友達と遊んでいた。



資料⑤

別の場所を地面に向かいシャボン玉を吹いている子どもたち。(4.5歳児)

うわー！くっいた！
つなびてる!!

これ、あもしろ
みたい

H児、後ろを見ている。



資料⑥

いっはーい、つなびたら
ぶわうにみえる

すごいー！
早くもやってみよう

H児、座り込んで見ている。

1/0.1

《子どもの学び》

シャボン玉が吹ける事に自信があったので、年長児の遊びの発見や会話に興味を持っていたと思う。地面にシャボン玉を吹く遊びを4歳児、5歳児のグループの中でチャレンジ出来た。

《保育者の学び》

保育者が見えていない子どもの学びが写真から読み取る事が出来た。言葉での表現の少ないH児が、自分から異年齢のグループに入り、自分の思いを表現している事に驚きを感じた。

《次への展開》

シャボン玉遊び等、好きな遊びを通して、友達との関わりを持てる様にする。自分の気持ちを表現して行く環境に配慮する。

ii) 観察記録から考察する教育的効果

観察記録①における、E子、K子、S子達には、しっかりと自分達の居場所が確立されており、それを毎日の遊びの環境から体感する事が出来ていた。それ故、クラスの一員として好きな友達と思う存分に遊びへと没頭する事が可能となっていたと考える。また、自分で選んだシャボン玉と言う自発的な活動を通し、情緒的な快が育まれる経験をも得ていた。そこでは、自分達の活動に対し、注意を払い、集中を維持し、共に参加すると言う能力の発達も促されていたと考える。更に、シャボン玉を地面に吹く事により様々な発見が子ども達により成されたと言う事は、その遊びが意味のある学びとして保育者に尊重され、自発的遊びの重要性が認められたと言う事である。物事を自分で選び決めて、問題が生じたら自ら解決して行くと言う能力の発達が尊重された場面である。

今回のシャボン玉を選択したと言う自発的な遊びでは、5歳児の女児達にとって能動的な探索や思考、理由付けの為の方法を多く学んだ活動であったと言える。それは、問題を立てて解決する、パターンを探す、目的に従って分類する、推察や試行錯誤を繰り返す中で理論的に考える、比較する、質問する、他の子ども達に説明をする、他の意見に耳を傾ける、観察等に参加する等、その世界を探索し意味を知って行く為に多くの方法を用いる事で自信を培って行ったと言える。

更に、人との関係を培う事を苦手としていたH児に対しても、女児達は、他の子どもへの敬意と関わりの心地よさを感じるという機会を持つ事で、互いに個人として大切にされる事を経験した。これは、他の人の視点に立って考える能力や他の人に共感する能力を徐々に発達させる事に繋がると考える。

一方、観察記録②におけるH児は、得意とするシャボン玉遊びを媒体に、他の子ども達と一緒に遊ぶ事で励まされると言う環境を経験する事が出来た。そこでは、他の子ども達と関係を作り、それを維持し、楽しむ為のストラテジーとスキルを発達させた。その中には、多様な場面の中で順番を守る、問題を解決する、交渉する、他の人の視点に立つ、他の人の助けになる、他の人の態度や感情を理解する等が含まれている。また、個人として尊重される事により、自分の知っている事についての実在的な概念や、自分の出来る事と出来ない事の実在的な概念をも培う事が出来た。

この様に、自発的な活動を重んじ、子どもの姿を肯定的に捉え様とする試みの中だからこそ、H児は非言語的コミュニケーションスキルを様々な目的で発達させる事の出来る環境を経験する事が出来たのである。加えて、子ども達自身で、創造したり表現できる多様な方法を発見し発展させる環境も経験出来たと言える。

今回の観察記録は、当初、5歳児女児3人を追っていたものであるが、記録として残されていた写真に偶然H児が映っており、それにより彼の学びに気づく事が出来た事例である。子ども一人一人の遊びが意味のある学びとして尊重され、自発的遊びの重要性が認められると言う

事は、その子どもの自信を増し、象徴遊びやごっこ遊び等の経験を広げて行く事に繋がる。また、自然界や社会的世界、身体世界や物質世界の意味を知る為の基礎理論をも発展させるのである。

全ての子どもを信じて見守ると言う姿勢は大切であるが、日常生活の中では大変難し事でもある。しかし、出来る限り子どもの学びに関心を寄せようとする保育者の姿勢があったからこそ、デジタル機器を駆使した観察記録が、子どもを理解する為の有効な手段となり得る事に気づいた観察記録である。

iii) 遊びの観察記録とピアジェの子ども理解

今回、A市保育研究会に参加している園の保育者により、多くの観察記録が収集された。ここでは、子どもを全面的に信じる事を前提に、子どもの主体的活動としての遊びに視点を置いた。何故なら、子どもの主体性や内発的動機等の表頭は、我々大人が子どもを信じる事により可能になると考えたからである。これが前提にあつてこそ、自発的な活動としての遊びに深まりが見られるのである。勿論、そこには個々人における発達過程の課題に沿った保育環境が準備されなければならない。

ピアジェも教育環境に関して常に鋭い指摘を行っている。それは人的環境としての保育者の資質にまで及ぶものである。「知的自由の教育は、協力と共同による探求を前提としている。生徒と教師との間に存在する関係は、教師＝権威者であると言う視点から不十分である。もし批判的精神と証明の意味を教えたいのであれば、生徒達は、共同による仕事を実行したり、また1日のある時間を自由に議論する事が必要である。学校自体の中に、生徒自身による自発的な社会生活が必要となる」³⁹と述べている事からも理解できる。そして、この言葉を各園で観照し応用したものが、今回の観察記録からの考察である。保育者は決して権威者ではない。常に子どもを信じ、その行動を見守る存在である。この様な保育者の姿があるからこそ、子どもは納得の行くまで自らの学びを遊びによって深める事が出来る。ある時には、そこに仲間がおり共同による遊びによって各自の学びが深められる。またある時には、遊びの中で自分の意見を自由に述べる事により学びが深められる。この様に、自発的な活動としての遊びと共に、自発的な社会生活をも営む事が出来るのである。

今回は、子どもを観察する時「子どもを信じる事」「信じきる事」から始めた。これを前提にすると、自然と子どもの肯定的な姿に視点は置かれていった。観察記録によって見えてくる個々人の成長と学び、職員間での共有、更に深まる次への保育の展開等、保育者としての資を深めて行く為には観察記録は必須である。今後は、さらに観察記録からの読み取りを中心に遊びの教育学的意義について探究していく。

おわりに

ピアジェは、長年に亘り子どもの遊びの観察を続けてきた。そこでは、自発的な活動に重きが置かれ、子ども自身が選択をし、決定をする。その行動を大人は信じて見守る事が求められる。これにより、子どもは自らの思考を深めて行く事が出来るのである。そこには常に自由が存在し、子どもの学びがある。彼は自由の教育について「自分自身で思考できないままにとどまっている個人は自由ではない。内的な無秩序が思考を妨げ、本能と感情による空想や主観的な幻想によって支配され、自我と無意識との矛盾する傾向の全体の中で揺れ動いている個人はもはや自由ではない。それとは反対に、批判する事が出来、その個人に共通し、また外的な権威に全く依存しない自律的な理性に奉仕している個人は自由である」⁴⁰と定義している。

学校教育法第22条では「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児のすこやかな成長の為に適当な環境を与えて、心身の発達を助長する事を目的とする」⁴¹と記述されている。これは子ども個々人の発達過程における課題が支えとなり、それが観念の世界へと導かれ思考を深める事により、自発的な選択の能力を発達させて行くものである。そして、適当な環境と言われるものこそ、ピアジェの言う教育環境の事である。そこには、子どもの興味や関心に沿った環境が用意されている。決して保育者の独断や偏見、自己満足の為の環境準備ではない。昨日までの子どもの様子から、その活動が発展し行くと思われる環境を予測し準備するのである。観察記録で言う「次への展開」に記載されている部分である。しかし、適当な環境が準備されても、我々大人が強制や権威で子どもを環境の中に入れては意味がない。子どもを信じて待つのである。非常に難しい事ではあるが、子どもを信じると言う信念を持ち、今後も乳幼児期における遊びの教育的意義を探究する事で、子ども理解を深めて行く所存である。

- 1 J.Piaget, *de la pedagogie*, Educador, 1998. p.160 (芳賀純,能田信彦監訳『ピアジェの教育学』三和書籍, 2005年, 150頁)
- 2 ピアジェは、1921年から1925年にわたりルソー研究所附属幼稚園で研究を組織し、子どもの言葉や社会環境におけるデータを収集する事で児童の思考の研究に取り組んだ。その研究結果をまとめたものが最初に出版された5冊『児童の自己中心性』『判断と推理の発達心理学』『児童の世界観』『子どもの因果関係の認識』『児童道徳判断の発達』であった。彼は、認識論に取り組む際の材料程度に考え出版したものであったが、それは世界中に読まれる事となった。
- 3 J.Piaget, *le langage et la pensée chez l'enfant*, Neuchâtel, DELACHAUX & NIESTLÉ, 1923, p.66. (大伴茂訳『児童の自己中心性』同文書院, 1974年, 96頁.)
- 4 J.ピアジェ, E.H.エリクソン他著, 赤塚徳郎/森楸訳『遊びと発達の心理学』黎明書, 2000年, 26頁.
- 5 新村出編『広辞苑』岩波書店, 2008年.
- 6 イギリスの哲学者であり社会学者、心理学者である。進化論と心理学を統合する理論を打ち立てた。また、精神の内的な事象とそれを取り巻く外的な事象との関係において心の解明を目指した彼の心理学

- は、自ずと教育的な問いかけへとつながった。
- 7 ドイツの詩人であり劇作家であるが、イェナ大学の歴史学員外教授就任前後に、カント哲学に魅了され、美学及び美的教育に関する論文を執筆した。その思想の中心は、人間性における感性と理性との人間的対立の美と芸術による克服と言う問題にあった。
- 8 山田敏著『遊び論研究－遊びを基盤とする幼児教育方法理論形成の為の基礎的研究－』風間書房，1994年，29頁。
ここでは、スペンサーとシラーの両者の論より、遊びを引き起こす基盤として過剰エネルギーを定義しているが、山田は遊びの生起や消滅とは一致しないとの見解を述べている。
- 9 スイスの教育学者であり、若い動物の遊びに着目し、それが本能に基づくものであると考える事で、人間の遊びとは生活の準備活動でと考えた。
- 10 同上書，30頁。
山田は、動物の遊びから人間の遊びを生活の準備活動と定義したグロースにおいて、人間の大人の遊びに関しては、それは妥当性を欠くと考えた。
- 11 アメリカの教育学者であるホールは、ヘーゲル哲学に心酔し、生理学的な心理学への関心を深めた。
- 12 同上書，30-31頁。
動物の遊びの本質を、その動物の祖先が遠い昔に行っていた行為を繰り返す事であると定義した。例えば、投げる行為、疾走する行為、叩く行為等がそうである。しかし山田は、誕生後の遊びの現れ方に、固定的で一定した系列を認める事は困難であると考えた。
- 13 精神分析学の創始者である。精神学者である彼の思想は、精神分析学の展開により、心（精神）の構造を明らかにする事であった。
- 14 同上書，35頁。
子どもは遊びにおいて、現実生活で印象深い事柄を全て反復する事で、身体的及び社会的過程を自己にどうかさせると言う見方に対し、山田は、この見方により全ての遊びを説明する事は困難であるとした。
- 15 森進一，池田美恵，加来彰俊訳『法律』岩波書店，1993年，69頁。
- 16 美的教育に関する内容である。それは、感性と理性に対応する根本傾向、つまり、生命を対象とする質料衝動と形相を対象とする形式衝動に加え、両者を媒介とする遊戯行動を人間性に見出す事であった。
- 17 F.シラー著，小栗孝則訳『人間の美的教育について』法政大学出版局，1972年，98頁。
- 18 オランダの歴史学者であり、遊びの文化的研究として執筆されたものが『ホモ・ルーデンス』である。これは、遊びの遊びの研究には欠く事の出来ない視点である。
- 19 人間存在の本質を「遊ぶ人（Homo Ludens）」として捉え、遊びを文化形成要因として理解すると共に、比較文明的観点から議論した。
- 20 広い意味では、フランスの哲学者である。特に何かを専門にしていたと言う訳ではないが、知識を幅広く蓄えた文化人である。
- 21 J.カイヨワ著，霧生和夫訳『遊びと人間』岩波書店，1997年，9頁。
- 22 同上，9頁。
- 23 フランスの哲学者である。ルアン大学で教鞭を取っていた。
- 24 J.アンリオ著，佐藤信夫訳『遊び－遊ぶ主体の現象学へー』白水社，2000年，137頁。
- 25 同上書，137-138頁。

- 26 教育学的内容の論文とは、J.Piaget, *Psychologie et Pédagogie* Paris, Denoël, 1969（竹内良知・吉田和夫訳『心理学と教育学』明治図書、1975年）と J.Piaget, ., *Où va l'éducation?* Paris, Denoël-Gonthirr, 1972（秋枝茂雄訳『教育の方向』法政大学出版、1982年）の2冊である。
- 27 前掲書, J.ピアジェ, E.H.エリクソン他著, 赤塚徳郎, 森稜訳『遊びと発達の心理学』25-26頁。
- 28 J.Piaget, *Psychologie et Pedagogie, paris, Denoel*, 1969, p.229（ピアジェJ著,竹内良知/吉田和夫訳『教育学と心理学』明治書房、1975年、146頁。）
- 29 J.Piaget, *Rapport du directeur*, Le Bureau international d'éducation en 1930-1931, genève, BIE, 1931, p.42.
- 30 山田敏は「生成としての遊び」として、その概念を追及する場合、二つの見方が存在すると言う。「既製品としての遊び」と「活動の主体の心理状態からみる遊び」である。山田は後者の方を支持している。
- 31 F.フレーベル著,新井武訳『人間の教育（上）』岩波文庫,1997年,71頁。
- 32 J.Piaget, *Où va l'éducation, UNESCO, 1972*, p.104.（秋枝茂夫訳『教育の未来』法政大学出版局、1982年、123頁。）
- 33 *Ibid.*, p.13.（邦訳、6頁。）
- 34 *Op.cit.*, J.Piaget, *La formation du symbole chez l'enfant*, p.123.（邦訳、62頁。）
- 35 *Op.cit.*, J.Piaget, *Où va l'éducation*, p.13.（邦訳、7頁。）
- 36 *Ibid.*, p.25.（邦訳、22頁。）
- 37 *Op.cit.*, J.Piaget, *Psychologie et Pedagogie*, pp146-.147.（邦訳、97-98頁。）
- 38 A市では保育所の民営化が進んでいる。最終的には、現在の半分にまでなる予定である。その様な中、どのような状況にあっても保育の質は守るべきと言う思いから、近隣の保育所と連絡を取り合い所長等が集まり、月に一度、自主保育研究会を持つ様になった。本論では以降、この研究会をA市保育研究会と呼称する。
- 39 *Op.cit.*, J.Piaget, *De la pedagogie*, p.160.（邦訳、150頁。）
- 40 *Ibid.*, p.158.（邦訳、148頁。）
- 41 鈴木勲編著『逐条 学校教育法』学陽書房、2009年、195頁。

参考文献

- C.カミイ,R.デブリーズ著, 稲垣佳世子訳『ピアジェ理論と幼児教育』チャイルド本社、1980年。
- 波多野完治著『ピアジェの児童心理学』国土社、1975年。
- 波多野完治著『ピアジェー人と思想』小学館、1990年。
- J.Piaget, *Psychologie et pedagogie*, denoël, 1923.（竹内良知/吉田和夫訳『教育学と心理学』明治図書出版、1975年。
- J.Piaget, *Le langage et la pensée chez l'enfant*, delachaux et niestlé, 1941.（大伴茂訳『児童の自己中心性』同文書院、1974年。）
- J.Piaget, *La représentation du monde chez l'enfant*, puf, 1947.（大伴茂訳『児童の世界観』同文書院、1956年。）
- J.Piaget, *Sagesse et illusions de la philosophie*, puf, 1965.（岸田秀/滝沢武久共訳『哲学の知恵と幻想』み

- すず書房, 1976年.)
- J.Piaget, Jean./Bärbel, Inhelder., *L'image mentale chez l'enfant*, puf, 1966.
2. (秋枝茂夫訳『教育の未来』法政大学出版局, 1982年.)
- J.C.ブランギエ著, 大浜幾久子訳『ピアジェ晩年に語る』国土社, 1985年.
- J.Piaget, *de la pedagogie*, Educador, 1998. (芳賀純, 能田信彦監訳『ピアジェの教育学』三和書籍, 2005年.)
- J.ピアジェ/ E.H.エリクソン他著,赤塚徳郎/森楸訳『遊びと発達の心理学』黎明書, 2000年.
- J.アンリオ著, 佐藤信夫訳『遊び—遊ぶ主体の現象学へ—』白水社, 2000年.
- 倉橋生著『グロースの遊戯論』夫人と子ども第15号, 1915年.
- 三島唯義, 滝沢武久訳『ピアジェ・インヘルダー訪日講演集 創造的知能の開発』誠文堂新光社, 1972年.
- 三嶋唯義著『ピアジェ 晩年の思想』行路社, 1981年.
- 森田信博著『F.L.ヤーンの体育遊戯論について』秋田大学教育学部紀要第41号, 1990年.
- 内閣府, 文部科学省, 厚生労働省著『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館, 2015年.
- R.カイヨワ著, 霧生和夫訳『遊びと人間』岩波書店, 1997.
- 荘司雅子著『フレーベル教育学への旅』日本記録映画研究所, 1985年.
- S.アイザックス著, 榊瑞希子訳『幼児の知的発達』明治図書, 1989年.